



上川井だより

令和5年6月30日
横浜市立上川井小学校
校長 山崎 真紀子

7月号

はさみとタブレット

雨が続き蒸し暑い日が続いています。私たち人間にとっては過ごしやすい時期ですが、校庭の紫陽花や木々の葉は、恵みの雨を受け生き生きとしているようです。ぐんぐん生長する草木にならない、子どもたちも遅しくのびやかに過ごせるよう支援していきたいと思えます。

さて、先日、1年生の教室でタブレットの使い方についての学習がありました。先生の説明を聞きながら、タブレット上で文字を書いたり消したり、書き込んだデジタル付箋を提出箱に送信したりしていました。「どこを押せばいいの。」「このマークだよ。」「できた、できた。」と嬉しそうです。今後は、育てている植物の写真の取り込みやプログラミング体験も行っていきます。

次に図工室へ行ってみると、4年生が自分の創作した図工作品をタブレットのカメラで記録しています。学びの蓄積をたどりながら、新しい技法に挑戦したり、次の学習の発想に役立てたりするためです。高学年になると、裁縫の学習で作業確認のために動画を視聴したり、委員会活動でデジタルアンケートを行ったりと、学習や生活の様々な場面で活用しています。

一方、去る6月17日には、旭警察のスクールサポーターにお越しいただき、3年生～6年生を対象としたサイバー教室を開催しました。インターネットを使う際に気を付けなければならないことやネット上に潜む危険、誤解を受ける表現などについて、具体例を示していただきながら考える時間を作りました。「ネットで自分が送る言葉を見直したい。」「写真は、みんなの思い出と思っていたけれど、見られたくない人もいると気づいた。きちんと確認してからシェアしないといけないと思った。」「困ったときは、一人で悩まず家族や友達に相談することが大切だと思った。」と、それぞれ自分の生活に当てはめて真剣に考える姿が見られました。この教室の中で、一番強調されていたのは、危険なことに巻き込まれていないか「判断する力」、人を傷つける表現や誤解を生む言葉を使っていないか見直し、相手を尊重して利用する「思いやりの心」、悪い誘いや興味本位の誘惑に負けない「我慢する心」の3つでした。

こうした情報モラル教育によって子どもたちに行動の自制を促しつつ、デジタルの便利さや活用の仕方を学び、デジタル社会を賢く生きていく力を培っていきたくと考えます。まさに、はさみと同じです。使い方によって便利な道具にも危険なものにもなりうるデジタルツールとの向き合い方を子どもたちには学んでほしいと思えます。

デジタルツールを使いこなす、自分で管理していくための「活用・自律・行動規範」について、バランスよく学ぶ場面を設定し、負の側面をしっかりと認識しつつ、今後も正しく活用できる力を育てていきたいと思えます。